

---

マイペースな日常で。

ha4ba

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マイペースな日常で。

### 【Nコード】

N1467Y

### 【作者名】

h a 4 b a

### 【あらすじ】

いつも仲が良いと言われている二人の少年達。だが、そんな少年達は別々の道を歩む事になる。彼らは新しい生活で何を手に入れて生きていくのだろうか

## プロローグ（前書き）

以前短編小説で投稿した作品の連載ver.です！良かったら見て行って下さい！

## プロローグ

何も無い、誰も居ない、そんな場所で向かい合っている二人の少年達。

一人は剣を、もう一人も剣を所持している。

この戦いで負けた者には罰が待っている。

両者一步も譲れないこの戦いは、三時間の激闘と化していた。お互いの視線が重なる。

一人は大柄でガタイの良い少年。もう一人は普通の格好をした少年。そして、大柄の少年が動く。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

腕に力を込めて、ヒュンツ！！ とデカイ音が聞こえるほど早く振り回している。しかし。

普通の格好をした少年はそれを即座に避け、ガタイの良い少年に切り掛かる。

「ッ！！」

ガタイの良い少年は予想外だと言わんばかりに、驚きの表情を隠せないでいた。

そして。

ビシュツ！！ と良い音が聞こえ、ドタンツ！！ と倒れこむ音が響いた。勝者はこの瞬間、決まった。

勝者は水崎嘉承みなさきかしょうと言う、普通の格好をした少年の方だった。

「クツソオ！ 負けちまったああああ！！ 何度目だあ！ これは何度目なんだああああ！！！」

コントローラーを頭にガンガンッ！ とぶつけるその少年は、先程からゲーム連敗中の黒井龍次くろいりゆうじと言う。

「単純に言ってるやろう。お前が弱いだけだ」

お前相手じゃ飽きる、と言ってコントローラーを置くその少年は、先程からゲーム連勝中の水崎嘉承みなせきかじょうと言う。

二人共高校二年生で、お洒落をしない事で有名となっている。

だから両者共に特徴が無い。有ると言えば、黒井だけが持っているその面倒な性格だろう。

「ああ、何か叫んだらスッキリしたわ。さて……そろそろ行くこうぜ？」

「ああ。そうだな」

ゲームの電源を切って、テレビのリモコンを探している水崎に、黒井がリモコンを見つけて渡す。

「ほら、これだろ？」

水崎はリモコンを受け取って、テレビの電源を消す。

「お前にしちや気が利くな。その調子で今度俺にラーメン奢れ」

「何故にッ!？」

二階にある部屋から一階の玄関まで二人はゆっくり歩いて行く。

そして玄関の扉に手を掛けて、扉を開く。

「今、何時？」

時計を全然見ていなかった為か、時間が分からないので黒井に水崎が聞く。

「ちよい待ってなあ……七時四十五分だぜッ！」

「いちいち大きな声で言わなくても良いから……まあ良い。行くぞ」  
そして二人は路地に出る。

雲が一切無く、快晴と言える程の太陽の光が二人を襲う。

「やべえ……クソあちい」

早くも変な歩き方になっている黒井。

「そろそろ慣れるよ……って言っても俺も駄目だわ」

いきなりダウンしてしまいそうな二人だが、水崎はこのペースは遅

いと思い、少々ペースを上げた。

「なあ……ちよつと速いって」

「シロ……お前が遅いだけだ。もつと速く歩け」

シロとは水崎が付けた黒井の呼び名である。

そして黒井は水崎にクロと言う呼び名を付けた。

この二人の関係を表す意味らしいが、周りにはあんまり理解出来ていない。

「そんな事言ってもよ……暑さには人間は敵わないのだよ」

「お前のウザイ性格ならどんな暑さにだって負けねえよ。さつさと速く歩け」

面倒なやり取りをしたなと思いつつも、口角が上がっている水崎。

この二人は幼馴染であり、最も仲が良いと評判である。水崎はそれを認めていないが。

「へいへい……つてもう見えたじゃねえかつ!!」

「あ、気付かなかった」

二人の路地の先にはデカイ一つの建物。其処には二人と同じ服装の人間達が入って行っている。

「おかしいからね!? 気付かないとかホントおかしいからねツ!」

「シロ……落ち着け。無駄話してたから早く着いたんだ。別に良いだろ?」

「ああそうだな。早く着いたし、別に良いか!! って何でやねん!?!」

二人の声がデカイのか、沢山の視線が彼らに浴びせられる。

「ちよつと目立ちすぎだな。もう中に入るっ」

「そうだな。クロ!! 早く入ろうぜ!」

そして二人は建物の中に入っていく。

沢山の人物が、相変わらず仲の良い二人、と呟いている。

しかし、そんな二人を見れるのもこれが最後、と呟く者も居た。

そう、今日は卒業式。

彼らが中学生を卒業する日である。

## ブローグ（後書き）

ご感想など有りましたらお願いします。そして誤字などの発見も有りましたらヨロシクお願いします！

## 第一話（前書き）

かなり文字数少ないですが、その辺りは御了承下さいませ。

## 第一話

その後、二人は卒業式に出席する。

長いようで短かった三年間。お世話になった校舎を拝め、先程受け取った卒業証書を見つめる。

（短かったな……三年間。ホントに終わりなんだよな）

そんな事を小さく呟いた水崎。ふと顔を上げると、卒業証書を受け取っている最中の黒井を見つけた。

古くからの付き合いって事もあり、緊張しているのが水崎にはバレバレだった。

（保育園で初めて俺とシロは会ったんだっけ……駄目だ。はっきり思い出せねえ）

黒井が緊張しつつも、ミスを犯さないよう卒業証書を受け取った事にホッとする水崎。

せめて卒業式くらいはしっかりやがれ、と言ってやりたい。

（そういえば……小学校中学校で同じクラスになったことは一回も無かったねえ……）

奇跡と言っても良いほどの運の悪さ。

クラス替えて一緒のクラスになった事は一度も無い。

それがこの二人だった。

最初は水崎も残念だったが、後々になってくると慣れていた為、全く気にしていなかった。

最も、黒井だけは残念な感じを露にしていたが。

そんな事を考えている内に、卒業式は進行している。

そして、こんな事も思った。

（最後の最後でシロとは別々の道を歩む事になるのか……寂しいモンだねえ）

水崎は普通に進学、つまり高校に行く。だが黒井は違った。

自分の夢を叶える為に、就職する事にしたらしいのだ。

親は当然反対した。それでも、黒井龍次は聞かなかった。

その夢について語れと両親は言ったらしいが、それを断固拒否した。結果、黒井の夢を知っている者は誰も居ない。

（俺も知りたかったんだけどな……まあ良い。親の承認も通った事だし、シロもシロらしく頑張るだろうな）

沢山の事を考えていた。気付いたら歌を歌い終えて、卒業式終了目前だった。

長いようで短かった三年間が、遂に終わる。

『、以上で卒業式を終了します。気を付け……礼』

黒井龍次。水崎嘉承。この二人の新しい物語はこれから始まる。

## 第一話（後書き）

ご感想など有りましたらお願いいたします。そして誤字などの発見も有りましたらヨロシクお願いいたします！

## 第二話

卒業式が終わって、高校生活が始まるまで余裕が有った水崎は、散歩に出掛けていた。

ベンチを偶然発見した為、其処に腰を下ろす。

目を閉じて、再び開ける。そして空を見上げながら水崎は一言、

「……俺はもう、アイツと馬鹿やりまくってた中学生じゃねえんだ」  
周囲に人は居ない。桜の花が満開の木の下で、ただ一人、呟いた。

「新しい道をお互い進めるんだし、良いんだけどな」

そう口では言いながら、心中では嬉しいとは思っていない。

その辺がまだ子供なんだよな、と自覚はしている。それでも本人が嬉しく思えないのだからしょうがない。

何を言っても変わる事は無い決心を持った黒井を、水崎は少々羨ましいと思っっているのだ。

「さて……別れを惜しむよりも、シロの旅立ちを祝ってやるか！」  
自分も心機一転。新しく始まる、黒井龍次が居ない学生生活。

その生活を楽しめるように、旅立ちを心の底から祝そうと思った。

黒井龍次は、とあるビルの屋上に居た。リュックサックを背負っているすの姿は、何とも言えない位に生き活きしている。

「うーん……やっぱりクロには言っておきたいなあ」

無糖の缶コーヒーを片手に、並べられた椅子に座り、コーヒーを一気に飲み干した黒井。

「やっぱりコーヒーは無糖に限る」

そして軽くなった缶コーヒーの空き缶を投げた。それは見事、ゴミ

箱にシユートされる。

「よっしゃ！」

周囲に人が居るのも気にせず、大声で歓喜の声を上げる。

「……俺の本当の目的、誰にも話せてねエなあ……本当はクロだけにでも話してやりたかったのに」

黒井が背負っていたリュックには一つの地図に水筒、財布に赤い字で『黒井クロ』と書かれたカードが入っていた。

リュックサックをベンチに置き、カードだけをリュックから抜き取り、力強く握って再び戻す。そして、

「ちくしょう」

たった一言。だが、その声は震えていた。周囲には人は居なかった。誰もその黒井の声を聞いている者は居ない。

何かを恐れている為に出てくるその声は、震えながらもこう言った。

「何が夢の為に就職するだ……俺だってクロと同じ高校に行きたかった。クロともっと一緒に遊びたかった。もっともっと……ッ……！」

リュックサックを再び背負って、黒井は再び歩き出す。

「シロ……元はクロの仇名だったこの仇名、返上するぜ……小生は、今からクロに戻り、現実にする」

人格が変わったように、一人称の言い方が変わっていた。

その姿こそ、まるで何かに取り付かれたような姿だった。

その時だった。

黒井龍次の目の前に、『この世で起きる事が無い筈の現象』が現れた。

黒色をした『獣』だった。黒井龍次の身体を、それは飲み込んで行く。

正にそれはブラックホールそのものだった。そして。

一瞬の内に黒井龍次の姿は、消えた。

ピピピッ！ ピピピッ！ と鳴る携帯の着信音に水崎は目が覚めた。水崎の額には、大量の汗が噴き出していた。

「……………なんてこった。変な夢を見ちまったぜ」  
携帯に手を伸ばしながら、独り言を呟く。

「何だよ、あのリアルな夢は。頭でも打ったかなあ俺……………ああ、嫌な気分だ！」

携帯を開いて、受信ボックスを開いた。それと同時に、水崎は更に困惑した。

「……………ツ！？ おい……………嘘だろ……………まさか……………まさかツ！」

先程見た夢は現実では無いんだ、夢なんだ。

あんな悪夢が、あんなゲームみたいな事が起こる訳が無い。

じゃあ何故。

何故『先程見た夢と全く同じ事が書かれている』んだ？

メール送信者、黒井龍次。

件名、シロの仇名はお前に返上する。

本文、俺はもう引き返せない。お前と仲良く出来て本当に良かった。今までありがとな。元は俺に付けられていた仇名……………『クロ』は返してもらっぜ。

「……………何でなんだよ！ ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

## 第二話（後書き）

最近テス勉が忙しく、小説に集中出来ないので更新遅くなりそうです。

申し訳ありません（；；；）

### 第三話

「ガバツ！と起き上がったボサボサ頭の少年は、枕元の近くに置いた携帯電話に手を伸ばす。」

「……何だ？ さっきの意味の解らない話は？」

時刻は午前十一時十三分。

昨夜十時辺りに寝た少年の顔は、何故か晴れやかでは無かった。

「ヤバイな……よし、今度病院に行こう。そして心のケアをしてもらおう」

卒業式が終わって丁度一週間が経った。

新しく始まる高校生活まで、あと三日。

「シロの夢を見るとか、マジで意味が解らない。何故俺はアイツの夢を見るんだ？」

その時、水崎の携帯は震えた。

ピピピッ！ ピピピッ！ と鳴り出す携帯を開くと、其処には『黒井龍次』の文字が。

ピッ！ とボタンを押した音が音のしない部屋に響いた。

『ウィースッ！ 元気にしてるかクロ？ てか、もしかして寝てた系ですか、お前？』

「……お前が眠りを妨げてくれた事で、お前に対しての敵意が増幅した。今度ボクシングやろうぜボクシング……思いつきりぶん殴つてやるからさ」

『ちよつと眠そうな声でいきなりスングエ怖い事言うの止めてくれない！？ 今ブルツと来たんだけど！？』

水崎は眠そうな眼、眠そうな声を出しながら、外服に着替え、玄関のドアを開けるまでに五分も掛からなかった。

そして路地に着き、道に沿って歩き始める。

「何の用だよ、用件をさっさと話せ」

『ああ、別に……ただ、今日の朝さ変な夢を見てよ』  
変な夢？ と疑問を抱く水崎に、黒井は続けて喋る。

『何か俺が一人でちくしょう、的な感じの言葉を発してたんだよ。しかも夢の筈なのに、リアルさが半端無かったんだ』

「……………」

『でも、その夢に出てきた俺って何か俺っぽく無かったんだよなあ……小生なんて言葉、俺は使わないし……まあそんな事言っても意味解らないよな。ワリイ、今のは忘れてくれ』

思い当たる節がある水崎は、いきなりこんな事を心中で呟く。

（同じ夢だと？ 俺はコイツとシンクロしてしまったのか……アホだな、うん。俺もそろそろ大人に成らないとなあ……多分、似たような夢見たのは偶然だ。そうだ、きつとそうだ）

無理矢理、自分を納得させた様な点もあるが、これが水崎流の『気にしたら負け』精神だ。馬鹿だが、その辺りが大人らしい態度である事から、皆から人氣が有った。

尚且つ、口調が時折変わるのも本当は特徴だ。しかし、周囲の人間がそれに気付かないのも色んな意味で特徴なのかも知れない。

『まあ結局はお前の声が聞きたかっただけだ！』

「…………お前、長年一緒に居て気付かなかったけど、もしかして、あつち系？」

ブルツと身体を身震いさせる水崎からは、一瞬冷や汗が出た。

『違エよ！ 何であつち系だと思われちゃうの！？ そもそも、声が聞きたかったと言っただけで「あつち系なの？」って聞くの止めてくれッ！』

一瞬水崎の声を真似ていたが、そんな事がよく出来るよなあ、と関心する水崎はたった一言、

「んじゃ、切るぞ」

とだけ言った。その一言に啞然として沈黙する黒井は、ハッ！ と我に返って、大声で言う。

『ちよっとちよっと！ いきなり切るとか言わないでくれよッ！？』

「いや、お前が俺の声を聞きたかっただけと言ったから、もう用件は無いのかと」

『そりゃそうだ！俺がそう言ったからなッ！！よく考えたら他にも用件は有りましたよゴメンナサイッ！』

黒井の携帯から周囲の人の声が少し聞こえた。幼い子供の声が聞こえ、何か言っているのが分かった。

哀れとしか思えなくなる、黒井が今、どんな状態なのかが判明する。

「ねえーねえーお母さーん！何であの人、土下座してるのー？」

それに対して水崎は、呆れる事しか出来なかった。

### 第三話（後書き）

テスト期間一週間前に入りましたので、執筆スピード遅くなります。  
ご感想等ありましたら、是非是非お願いします（\*、、）旦

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1467y/>

---

マイペースな日常で。

2011年11月13日01時25分発行